高松短期大学紀要，24．1～9（1994）

自尊感情の安定性の測度に関する研究

An examination of the measure of stability of self-esteem

坪田雄二

問題・目的

本研究は，自尊感情の安定性をどのようにとらえるのか，といった自尊感情の安定性の測度に関して検討したものである。

社会心理学の領域では，状況や対人関係などの社会的環境の要因から人間の行動を理解しようとしている。しかし，これらの変数だけから人間の行動を理解するのは不可能であり，パーソナリティ変数を考慮にいれて，検討を行うことが多い。これまでの研究において，考慮されてきたパーソナリティ変数は数多く，ローカス・オブ・コントロール（locus of control），自己モニタリング（self monitoring），社会的望ましさ（social desirability）などが取り上げられている（詳細はバス，1991参照）。その中でも，自尊感情（self-esteem）は人間の行動や認知様式に大きな影響を与える変数として取り上げられており，原因帰属や社会的比較，分配行動や援助行動など，多くのものとの関連が検討されている（詳細は遠藤・井上・蘭，1992参照）。しかし，その多くは自尊感情のレベル，すなわち自分自身に対してどの程度の評価をしているか，[1]に関して注目したものがほとんどで，その安定性を取り上げたものは比較的少ない。

Tippett & Silber（1965）は，自尊感情と近い概念であるセルフ・イメージの安定性をどのように考えるかについて，以下のようにまとめている。①主観的評価と客観的評価の違い，すなわち，自らの安定性に対する評価と自分の安定性に関して他者が行った評価のズレ。②時間による違い。③セルフ・イメージの領域ごとの自己評価の違い。④状況によるセルフ・イメージの違い，例えば友人と一緒にいるときのセルフ・イメージと父親といるときのセルフ・イメージのズレ。⑤現実自己と理想自己のイメージの違い，の5つである。このように，安定性の概念を彼らは上記の5つにまとめているが，自尊感情の安定性を検討した研究では，上記の5つの内の2番目，つまり自尊感情の時間による変動を指標としたものが比較的多い。そこで，従来の研究を，その測定方法からまとめてみると，以下の3つに分類される。

1番目は，Rosenberg（1965）の作成した自尊感情安定性尺度（stability scale）を用いて測定したものである。これは，一度の測定結果からその安定性を測定しようとするものである。しかし，わが国では未だ標準化されていないのが現状である。

2番目は，Rosenberg（1965）やCoopersmith（1967）などの自尊感情尺度を2回評定させ，数学的指標を使ってその違いを算出し，安定性の測度とするものである。そこで用いられる数学

的指標も研究者によって異なり，Kugle Clements & Powell（1983）やWells & Sweeney（1986）は，2度の評定値をもとに，Cohen（1960）のκ係数を算出し，それを安定性の測度としている。そして，Drummond, Mcintire & Ryan（1977）やWallace, Cunningham & DelMonte（1984）などは，2度の測定をもとに，個人ごとの相関係数を求め，それを安定性の測度としている。これらの指標に関して，Wells & Sweeney（1986）は，Rosenberg（1965）の自尊感情安定性尺度による安定性を現象的安定性（phenomenal stability）と，数学的指標による安定性を統計的安定性（statistical stability）と命名している。

3番目は，Kernis, Granneman & Barclay（1989, 1992）やKernis, Granneman & Mathis（1991）で使われている方法で，約1週間の間に自尊感情尺度を10回程度評定させ，その標準偏差を安定性の測度としているものであり，統計的安定性のひとつである。ただし，彼らの初期の方法は，1日のうち，いつ評定を行わせるかを評定者にわからせないランダム・スケジュールで実施しており，そのための機器が必要であること，そして，評定時刻を固定した方法であっても1日に数度，評定させていることなどの点で，実験者側，被験者側ともに大きなコストがかかるため，本研究の安定性の測度の検討対象から除き，1番目と2番目の測定法について検討することにした。

ところで，上記の2番目の測定法には，κ係数を用いるものと相関係数を用いるものの2つが含まれているが，このうち後者に関しては，その適応範囲を考慮する必要がある。つまり，後者のような測度を用いた研究は，初回の評定の被験者として7才〜12才までの児童を用いた研究であること，そして短いもので6カ月，長いものでは6年といった評定間隔がとられていることである。このような時期は，自尊感情のレベルが高まる時期であり，また，長期の間隔をとることによる自尊感情の変動も大きいと考えられる。つまり，自尊感情のレベルそのものが変化しているため，κ係数のように両時点での各項目に対する反応そのものを直接比較しても，発達的変化による影響と自尊感情の安定性そのものの影響が混在しており，安定性の測度とは言い切れない。このような場合には自尊感情のレベルの変化を考慮した，両時点での各項目の評定値の相関係数を安定性の指標にした方が望ましいのである。もし，このような条件がなければ，通常，両時点での各項目の反応が共変動を示したからといって，それが安定性を示していることにはつながらない。

ここまでのことをまとめてみると，個人特性としての自尊感情の安定性を測定する方法として，従来の研究で用いられたもののうち，現段階で，本研究者に実施可能なものは，Rosenberg の安定性尺度を用いた現象的安定性とκ係数を用いた統計的安定性の2つである。ただし，このκ係数も完全であるとは言い難い。それは，その算出方法に原因がある。この係数はもともと名義尺度の一致率を算出する目的で考慮されたものであり，その係数において，1は完全に一致していること，0はチャンス・レベルと同じことを示すが，下限は評定の分布によって異なり，0〜−1の範囲をとることが知られている。つまり，この係数は，評定・分類の信頼性を検討するため評定者間の一致率を算出するといったように，評定結果全体を考えた場合には有効なものであるが，本研究のように個人ごとに安定性の指標を算出しようとした場合，評定結果の分布によって，

各個人の得点可能範囲が異なるため，同じ数学的手法を用いても，求められた数値（特にマイナスの得点の場合）が同程度の安定性を示しているとは言いきれないということである。

このκ係数に関する問題点を解決するひとつの方法は，数学的には単純な手法であるが，一致率（反応が一致した項目数／全項目数）を用いることである。この手法であれば，完全に一致した場合，つまり最も安定性が高い場合は1に，まったく一致しなかった場合，つまり最も安定性が低い場合は0に，なる。（ただし，項目数によって除するため，その指標は離散型の変数になってしまうという点は問題であろうが。）

そこで，本研究では，自尊感情の安定性を測定する方法として，一致率を算出する方法が使用可能なものであるのかどうかを検討することを目的とした。その際，現象的安定性，κ係数，一致率の相互の関係を検討するだけでなく，従来の研究で指摘された自尊感情のレベルと安定性の関連の様相が，一致率を用いた安定性でも見られるのかといった点もあわせて検討することとした。

方　法

被験者　4年制大学の男子80名，女子203名，計283名。

評定時期　1993年6月（プリテスト）と9月（ポストテスト）

手続き　以下の項目からなる質問紙を集団で実施した。

＜自尊感情のレベル＞　Rosenberg（1965）の自尊感情測定尺度（10項目）を星野（1970）が和訳したものを用いて回答させた（4段階評定）。なお，この尺度は，プリテスト，ポストテストともに用いた。

＜自尊感情の現象的安定性＞　Rosenberg（1965）の作成した自尊感情安定性尺度を本研究者が和訳したものを用いて回答させた。この尺度は，5項目からなり，3項目が2段階，2項目が4段階評定であった。なお，この尺度はプリテストのみで使用した。

結　果

＜現象的安定性の尺度に関する分布＞

得点が高いほど自尊感情の安定性が高くなるように得点化して，5つの項目尺度の内容の整合性を検討するため，主成分分析を行った（表1）。そして，第1主成分に，.45以上の負荷を示している4項目の合計得点を，現象的安定性の得点とした。

表1　現象的安定性の測定項目

現象的安定性の測定項目	第1主成分
自分自身に対する考え方が，日によって変わることがありますか。	.826
自分自身に対する考え方が，ころころ変わると思ったことがありますか。	.809
自分自身に対する考え方を大きく変える方ですか，それとも変えない方ですか。	.745
自分が価値ある人間だと思ったり，逆につまらない人間だと思ったりすることがありますか。	.476
どんな人でもどんなものでも，自分自身に対する考え方を変えることができないと思いますか。	.007
分散説明率	42.5%

＜統計的安定性の算出＞

プリテスト，ポストテストにおけるRosenbergの自尊感情尺度の回答をもとに，Cohen（1965）の方法に従ってκ係数を，反応が一致した項目数を全項目数で除することによって一致率を，算出した。

＜3つの安定性の測度の相互関係＞

上記のようにして求めた，3つの測度の相互関係を検討するため，それぞれの測度間の相関係数を，全体，男子，女子それぞれについて求めた（表2）。その結果，κ係数と一致率との関係

表2　安定性の3測度間の関連

	κ－一致	現象－κ	現象－一致
全　体（n=283）	.906＊	.159＊	.129＊
男　子（n= 80）	.890＊	.347＊	.302＊
女　子（n=203）	.915＊	.076	.052

表中の数値は，Peasonの積率相関係数。　＊p＜.05
κはκ係数，一致は一致率，現象は現象的安定性の略。

はいずれの場合にも，.900前後の非常に高い相関を示していること，そして，現象的安定性と統計的安定性の間の関係は，κ係数，一致率，いずれの指標を用いても類似した結果を示していることが明らかにされた。

＜自尊感情レベルに関する分析＞

まず最初に，Rosenbergの自尊感情尺度の構造を検討するため，得点が高いほど自分に対する評価が高くなるように得点化して，プリテスト，ポストテストそれぞれにおいて，因子分析（主因子法，PROMAX解）を実施した。その結果，いずれのテストにおいても，各項目のまとまりはほぼ同じであったため，よりまとまりの明確なプリテストの結果を，自尊感情のレベルの測度として用いることにした（表3）。表3を見ると，第1因子はほとんどの項目が否定的な表

表3　プリテストの自尊感情尺度の因子分析結果

自尊感情レベルの測定項目	第1因子	第2因子
もう少し自分を尊敬できたならばと思う。	.786	-.118
私は時々，自分がてんでダメだと思う。	.770	.033
どんなときでも例外なく自分を失敗者だと思いがちだ。	.749	.021
私は時々確かに自分が役立たずだと感じる。	.728	.112
私は自身に対して前向きの態度をとっている。	.502	.233
私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人だと思う。	-.025	.850
私は，自分にはいくつか見どころがあると思っている。	-.069	.816
私はたいていの人がやれる程度には物事ができる。	.029	.709
私にはあまり得意に思うことがない。	.215	.550
私は全ての点で自分に満足している。	.331	.402

現で述べられている項目であり，第２因子はその逆に肯定的な表現で述べられている項目であることがわかる。この結果は，同じ尺度について因子分析を行ったCarmines & Ziller（1979）の結果とほぼ同じ結果であり，彼らにならって第１因子を消極的自尊感情の因子，第２因子を積極的自尊感情の因子と命名した。また，彼らはこのような２因子に分類されたのは，反応の構えによって汚染されることによって生じたためであり，この２因子それぞれと，心理学的傾性，社会的・政治的態度などの外的変数との相関係数が非常に類似していることから，この２因子は単一の次元を測定していると解釈している。そこで，本研究では，消極的自尊感情，積極的自尊感情のレベルだけでなく，その両者の合計得点，つまり，全体的な自尊感情のレベルについても考慮して分析することとした。

＜３つの安定性の測度と自尊感情のレベルの関係＞

３つの安定性測度と自尊感情全体，積極的自尊感情，消極的自尊感情との間の相関係数を，全体，男子，女子別に算出し，安定性とレベルの関連を検討した（表４）。全体に関する結果，κ

表４　安定性の３測度と自尊感情のレベルの関連

		κ係数	一致率	現象的安定性
全体	自尊感情全体	.084	.103	.231＊
	積極的自尊感情	.035	.039	.134＊
	消極的自尊感情	.111	.140＊	.273＊
男子	自尊感情全体	.265＊	.232＊	.365＊
	積極的自尊感情	.262＊	.194	.325＊
	消極的自尊感情	.237＊	.238＊	.357＊
女子	自尊感情全体	-.012	.034	.127
	積極的自尊感情	-.074	-.041	.010
	消極的自尊感情	.045	.092	.201＊

表中の数値は，Peasonの積率相関係数。　＊p＜.05
nは，それぞれ，283,80,203である。

係数とレベルの関係は，いずれの場合も有意な相関はみられず，一致率とレベルの関係では，消極的自尊感情との間のみに有意な相関がみられ，現象的安定性とレベルの関係は，すべての自尊感情において有意な相関がみられた。男子の結果では，一致率と積極的自尊感情との関係を除いたすべての間に有意な相関がみられた。女子の結果では，現象的安定性と消極的自尊感情の間のみに有意な相関がみられた。

考　察

本研究は，２回，自尊感情を測定し，その一致率を，κ係数の代わりに用いることの妥当性を検討することを主たる目的として行った。その結果，表２からわかるように，κ係数の一致率の間に，.900前後の非常に強い相関がみられていた。そして，自尊感情のレベルと安定性の関連の全体の分析から，現象的安定性と自尊感情のレベルには関連がみられるが，統計的安定性とレベルは，κ係数，一致率いずれの場合もほとんど関連がみられないという結果が得られた。この結果は，現象的安定性と統計的安定性（標準偏差）の両方を用いたKernis, Granneman &

Barclay（1989）の研究結果と一致するものである。このように，自尊感情の安定性をどのように考えるか，つまり現象的なものとしてとらえるか，統計的なものとしてとらえるかによって，レベルとの関連性が異なることが再確認され，一致率の測度を用いても，その違いは検出可能であることも明らかにされた。

以上のことから，自尊感情の安定性を統計的なものとしてとらえる場合，一致率の測度は，κ係数に代わるものとして有効であることが明らかにされた。また，一致率と現象的安定性との間の関連も，κ係数とそれとの関連と同様の結果を示していることからも，この有効性は裏付けられる。

次に，表4からわかるように，自尊感情の安定性とレベルの関係において，男子では両者の間に関連がみられ，女子では関連していないという性差がみられた。この原因は，以下のようなことが考えられる。ひとつは，本研究の結果そのままに，性によって安定性とレベルの関係が異なり，男子は両者が関係し，女子では関連しないという性による違いである。もうひとつは，性による原因ではなく，自尊感情のレベルの高さによる違いである。一般に，自尊感情は男子の方が高いといわれており，本研究でも男子（20.5）と女子（19.1）の間に有意な差がみられている。つまり，自尊感情の高い者では安定性とレベルの間に関連があり，自尊感情の低い者では両者の間に関連がないということである。ただし，どちらの解釈が妥当なものかについては，本研究の結果だけから明らかにされる問題ではなく，今後の検討課題となろう。

次に，現象的安定性の尺度に関する問題があげられる。現象的安定性の尺度はRosenberg（1965）によって作成されたもので，この尺度は海外では多くの研究で使われており，Franzoi & Reddish（1980）では，この尺度の構造を検討し，尺度の一次元性を明らかにしている。本研究では，主成分分析により，その一次元性を検討したが，5項目の内，1項目は除外される結果となった。Franzoi & Reddish（1980）の研究の評定方法と本研究で用いたそれとに違いがあるため，直接，比較はできないと思われるが，今後の研究では，日本におけるこの安定性尺度の標準化を進めていくことも必要であろう。

最後に，自尊感情の安定性の概念を再吟味することも必要であろう。問題・目的においても述べたように，自尊感情と類似した概念であるセルフ・イメージにおいては，安定性に関して多くの考え方が提唱されているが（Tippett & Silber, 1965），自尊感情については，現象的安定性尺度と統計的安定性の2つのとらえ方しかなされていない。それ以外の考え方，例えば，本研究でも示されたように，自尊感情には，積極的自尊感情と消極的自尊感情といった2つの次元が示されている。この両者のレベルの違い，つまりこの両次元において自分に対する評価が高い，あるいは低い者は自尊感情が安定しており，いずれかの次元のみにおいて自己評価が高い者は自尊感情が不安定であると考えることも可能である。このように，現象的・統計的安定性以外の観点も導入しながら，自尊感情の安定性を考えていくことも，今後の研究では必要となろう。

《引用文献》

バス，A.H. 1991　対人行動とパーソナリティ　大渕憲一（監訳）　北大路書房（Buss, A.H.1986 *Social Behavior and Personality*. Lawrence Erlbaum Associates).

Carmines, E.G. & Ziller, R.A. 1979 *Reliability and validity assessment*. Beverly Hills:Sage.

Cohen, J. 1960 A coefficient of agreement for nominal scales. *Educational and Psychological Measurement*, 2 0 , 37-46.

Coopersmith, S 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco:W.H.Freeman.

Drummond, R.J., Mcintire,W.G., & Ryan,C.W. 1977 Stabilty and sex differences on the Coopersmith self-esteem inventory for students in grades two to tweleve. *Psychological Reports*, 4 0 , 943-946.

遠藤辰雄・井上祥司・蘭　千壽（編）　1992　セルフ・エスティームの心理学　ナカニシヤ出版.

Franzoi, S.L. & Reddish, B.J. 1980 Factor analysis of the stability of self esteem. *Psychological Reports*, 4 7 , 1160-1162.

星野　命　1970　感情の心理と教育（一，二）　児童心理，2 4，1264－1283，1445－1477.

Kernis, M.H., Granneman, B.D., & Barclay, L.C. 1989 Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5 6 , 1013-1022.

Kernis, M.H., Granneman, B.D., & Barclay, L.C. 1992 Stability of self-esteem:assessment, correlates, and excuse making. *Journal of Personality*, 6 0 , 621-644.

Kernis, M.H., Granneman, B.D., & Mathis, L.C. 1991 Stability of self-esteem as a moderetor of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6 1 , 80-84.

Kugle, C.L., Clements, R.O., & Powell, P.M. 1983 Level and stability of self-esteem in relation to academic behavior of second graders. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4 4 , 201-207.

Rosenberg, M 1965 *Society and adolescent self image*. Princeton:Princeton University Press.

Tippett, J.S. & Silber, E.1965 Self-image stability:the problem of validation. *Psychological Reports*, 1 7 , 323-329.

Wallace, J.R., Cunningham, T.F., & DelMonte,V.1984 Change and stability in self-esteem between late childhood and early adolescence. *Journal of Early Adolescence*, 4 , 253-257.

Wells, L.E. & Sweeney,P.D.1986 A test of three models of bias in self-assessment. *Social Psychology Quarterly*, 4 9 , 1-10.

1) 自尊感情とは，自己の行動・態度に対する感情であり，自己の現状に対する満足や自信の程度を示す。一方，自己評価とは，自己の行動・態度に対する評価のことである。自己に対して肯定的，あるいは高い評価を下すことは，自己に対して肯定的な感情を持つことと同様であると考えられるため，本研究では，自尊感情と自己評価をほぼ同様のものとして取り扱う。

<SUMMARY>

An examination of the measure of stability of self-esteem

This study examined the validity of *ittiritu*, a ratio of concordance of responses of pre-test and those of posttest, as the measure of self-esteem stability. Past researches were used the following three indices of statistical stability, coefficient kappa,product moment correlation, standard deviation. It was insisted that kappa was not suitable for measuring each person's stability and should be substituted *ittiritu* for. In pretest, 283 subjects completed Rosenberg's(1965)stability scale(phenomenal stability)and self-esteem scale and in posttest self-estem scale.For each subject, statistical stability was computed as kappa and *ittiritu*. The results suggested that *ittiritu* highly correlated with kappa and both *ittiritu* and kappa uncorrlated with phenomenal stability and level of self-esteem. The value of *ittiritu* as self-esteem stability and the concept of self-esteem stability was discussed.

高松短期大学研究紀要

第 24 号

平成6年1月31日　印刷
平成6年1月31日　発行

編集発行　高松短期大学
〒761-01　高松市春日町960番地
TEL(0878)41－3255
FAX(0878)41－3064

印　刷　高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地